

第64回 国際経済協力セミナー

「TUFS から国際協力の舞台へ ～二カ国間援助機関で働くということ～」

講演者：深谷春奈氏, 国際協力機構 (JICA) 企画部 国際援助協調企画室

草案作成：グループ11

磯野嵐士 北山拓 広瀬ないる

文責：小林すみれ



今回は、現在 JICA で活躍している深谷春奈氏による講演が行われた。講義内容は自己紹介、ODA 及び JICA に関する説明、海外 OJT で見た日本の援助の現場、外大生に向けたメッセージであった。

## 1. 自己紹介

ここでは主に自身の業務内容についてのお話を中心であった。自身が所属している部署の業務内容について大きく二つに分けていた。1つは国際機関との連携を通じた JICA の事業効果の向上（各種国際会議・面談対応、国際会議の開催、現場における他のドナーとの援助協力）であり、もう1つは国際的な援助潮流の動向把握、国際場裡での JICA のポジションの発信である。ここでは他の国際機関の仲立ちをしていることも語られていた。

## 2. ODA

ODA について。ODA とは、Official Development Assistance（政府開発援助）の略。内容は政府または政府の実地機関によって開発途上国に直接供与されるもので、開発途上国の経済・社会の発展や福祉の向上に役立つために行う資金・技術提供による公的資金を用いた協力のこと。ここで深谷氏は開発途上国に直接供与されるものと国際機関を通して供与されるものの二つがあることを強調していた。ODA の目的は「国際社会の平和と発展に貢献し、これを通じて我が国の安全と繁栄の確保に資すること」でありその背景に以下の4つ挙げられていた。1. 山積する国際社会の問題、2. 世界の主要国としての責務、3. 平和を希求する日本、4. 日本の安全と繁栄の確保である。第二次世界大戦後、日本は他国からの援助を受けつつ発展し、今では援助をする側になった。自国の経験をもとに援助の重要性を知っている日本は世界の主要国としての責務を果たそうとしていると深谷氏はおっしゃっていた。

## 3. JICA

JICA について。名称は独立行政法人または国際協力機構である。現在の理事長は田中明彦さん。前任は緒方貞子さん。緒方さんは元 UNHCR の代表であったことで有名。JICA の職員は 1842 名（常勤）、関係者は約 2 万人（ボランティア等も含む）。JICA は非常に規模の大きい集団であることがわかる。JICA の目的は「独立行政法人国際協力機構法（平成 14 年法律第 136 号）に基づき設立された行政法人で、開発途上地域等の経済及び社会の開発若しくは復興又は経済の安定に寄与することを通じて、国際協力の促進並びに我が国及び国際経済社会の健全な発展に資すること」である。この JICA の目的を達成するために、JICA は 4 つのミッションとビジョンを設定している。ビジョンは“全ての人が恩恵を受けるダイナミックな開発”である。このビジョンを支えるのが 4 つのミッションである。

①グローバル化に伴う課題への対応、②公正な成長と貧困削減、③ガバナンスの改善、④

人間の安全保障がその4つである。それぞれ詳しく説明する。まず①について。グローバル化の進展は、経済発展を促し、より多くの人に新たな機会をもたらすプラスの側面があるが、同時に貧富の差拡大、国境を越えた気候変動、感染症、テロ、経済危機などの様々な問題が生じるというマイナスの側面もある。これらの問題は、日本を含む国際社会の安定と平和を脅かすものであり、途上国にはより深刻なダメージとなる。これらの問題を日本の経験を生かして改善していくことが大切である。②について。途上国の貧困層は紛争、災害等に脆弱であり、また貧富の差な拡大は社会の不安定化につながる。これを解消し、公正な成長を図る。③について。ガバナンスの改善とは具体的に、資源を効率的に国民の意思にそって、配分、管理できる政府をつくることである。また、行政、法律制度を改善し、途上国の安定化を図る。④について。グローバル化により、国境を越えた問題、貧困、紛争等の被害にあっている途上国の人々の安全を確保し、ひとりの人間として尊厳ある生活を送れるよう支援する。

次に JICA の歴史について。JICA が設立される前にも前衛の事業団は存在したが、JICA 自体が設立されたのは 1974 年である。2008 年に JICA は JBIC と統合し、新 JICA となった。それに伴って新 JICA は JICA の無償資金協力、技術協力と、JBIC の有償資金協力の事業を統括し、一つの機関内で行うようになった。

JICA の事業について。JICA には主に 4 つの事業展開方法が存在する。1 つ目は、技術協力。途上国の開発を担う存在に対して日本の技術を伝播することで人材の育成を図る。また、制度を作るための専門家の派遣や研修員の受入れをも行う。2 つ目が、有償資金協力である。低金利かつ返済期間の長い緩やかなローンで、途上国の社会経済インフラの拡充を支援している。3 つ目が、無償資金協力である。所得水準の低い途上国からの返済を求めずに、社会経済の発展を支援している。4 つ目は、その他の協力として様々な支援を行っている。具体的には、ボランティアや個別専門家を派遣して支援している。

JICA の支援実績について。日本が 2008 年度までに政府開発援助を供与した国・地域は 181 国・地域である。世界で日本が承認している国の数は 192 国であること考えれば、日本はかなり多くの国を支援していることがわかる。これは全体の約 94%にあたる。

二国間援助機関としての JICA。二国間 ODA の地域別実績で見ると、アジア 15.5%、中東 34.2%、アフリカ 20.1%、その他 23.1%となる。今でこそ日本は、世界中の国々に対して ODA を供与していますが、歴史的に見れば、日本の ODA はアジアを中心としてきました。今日のアジア地域の発展に日本の ODA が果たした役割は大きいと言われる所以である。

### 3. 海外 OJT で見た日本の援助の現場

ここでは自身の OJT 先であるタンザニアについてと自身の現地でのお話をして下さった。タンザニアはアフリカの中でも貧しい国であり、発展のためには海外の援助がまだまだ必要である。「地方道路開発技術向上プロジェクト」というプロジェクトの名の下、現地の人々と協力しながら道路の建設が行われた。ここで強調されていた点は設計の段階から現地の人々が携わることでタンザニアの人々にもやる気が現れ、プロジェクトも円滑に進むということである。いかにしてプロジェクトを成功させるかを会議で常に話し合っていると述べられていた。またタンザニアでは個々の管理者の能力不足も実感したと深谷氏はおっしゃっていたがそれ以上に「データの共有」を組織で図ることができていないことが問題であると指摘しておられた。これは単に技術や資金を援助するのではなく制度面での改革にも JICA の協力が必要であるという趣旨ではないだろうか。

### 4. 外大生に向けたメッセージ

- ・多文化・多言語の勉強を通じて日本を見つめ直す。
- ・持っている情報を発信できるレベルに持っていく。
- ・広く浅く学ぶのではなく専門性も追求するべきである。
- ・数字にもある程度強くなる必要がある。

### 4. 質疑応答

質問 1. 国際協力という他に機関があるが、JICA を選んだ理由は？

回答 1. 大学では国際協力国家コースをとっており、大学院進学を検討したが、社会の現状を知らないままで大学院に行くことに疑問を持ち就職することにした。**新卒から国際協力の現場に携われる機関は JICA しかなかったため JICA を就職先に選んだ。**

質問 2. ODA の目的について、「ODA を通じて我が国の発展と繁栄と安全の確保に貢献する」とあるが、これは達成できているのか？スリランカのビデオを見て疑問に思った。

回答 2. ODA を通して日本が発展また繁栄しているかどうかは、数値化できず明確な断言はできない。しかし、日本が貿易など他国と深く関わって成り立っている以上、日本の平和と繁栄を維持するためには他国の平和と繁栄も不可欠である。

質問 3. 本日はジャングルを農地として開拓するなどの JICA の成功例を伺ったが、失敗することもあるはず。プロジェクトの失敗例とそのあとの対応は？

回答 3. 援助の失敗、頓挫、ということはない。なぜなら、**目的が達成されない限り、プロジェクトが終了しないから。**最低限、そのプロジェクトの中では目的が達せできるようにする。その後の国の発展に、そのプロジェクトが貢献していると感じられたら、第 2 回、という形で同じプロジェクトが継続される。ただし、そのプロジェクトがその国にとって

どのように働いたのか、何が有用で何が無用もしくは非効率的だったか、などの情報は仲間内で共有し、次に活かすべきだと考える。

質問4. 就職後、3ヶ月間の研修の間で、きれいな水を使えない状況にある発展途上国での現地研修があるとのことだが、現地で日本人スタッフは綺麗な水を使っていたのか？また、仕事への情熱からもっと現地に滞在したいと思ったか？また今後行くか？行きたいか？

回答4. 都市部には、煮沸すれば飲める程度の水は蛇口では出てくる。しかし私が現場に行ったときには、日本からミネラルウォーターを持参した。現地の人は慣れているので、煮沸すれば飲めるが日本人はお腹を壊すので。仕事をするにも体調を崩しては話にならない。今回研修で、3ヶ月という短い期間タンザニアに滞在したが、今後3～4年というスパンで必ず発展途上国に滞在することにはなる。

質問5. 発展途上国での援助において気をつけなければいけないことは？

回答5. 「教えてあげる」「支援してあげる」など、上から目線の言葉が用いられがちである。**現地の人々の技術は、確かに高くはないかもしれない。しかし、「学びたい」「発展したい」という意欲はとても強い。彼らの気持ちなどを尊重して活動することが重要。**あるとき、先方の道路公団の団長が忙しくて私との約束に間に合わないことがあった。私は次の業務があったので帰ってしまったが、あとから先輩に「あの団長さんの部屋を見たことがあるか？部屋は書類で埋め尽くされている。ときにはその書類の整理に追われて1日を終えることすらある。彼らの中には優秀な人材が少なく、多すぎる仕事に手が回りきっていない。彼は君との約束を軽視したのではなく、本当に忙しすぎて来られなかった。そういう事情も察せるようにしなさい。」と言われた。とても印象的なエピソード。

質問6. 今のメインの仕事は？今後やってみたい仕事は？

回答6. トルコ、カザフスタン、など更新国が新たに、JICAのように援助機関としての頭角を現してきており、私はJICAとしてそのドナーの取りまとめをしている。また集会などでJICAとして何を発信していきたいかを発案し発表用にまとめている。また、他団体からJICAへの面談があった際には面談を設定し、その後の処理を行う。

今後は、現地でのプロジェクトに携われる部署で仕事をしたい。現在特にアフリカに興味があるのでアフリカを支援できるようなプロジェクトに携わりたい。

質問7. タンザニアでの開発援助について。中国など他国の開発援助も多い。例えば、日本があるところに橋を架けたら実はすぐ近くに中国が橋を作っていたなど援助が被ってしまうことも起こり得ると思うが、そのように援助が被らないように、他国と協力して援助することはあるか？

回答7. はい。現在は一国、一地域に対するドナー（支援者）が多いので、**それぞれが得意分野を生かして連携する援助協調**を行う。他国と協調しながら援助を進めていく。現在、タンザニアでは鉄道開発を検討中だが、そこでもドナー会議が開かれ、ドナー同士の役割分担をしている。ただし、中国はなかなかドナー会議に参加しないので、中国が何をしているのか他国にはわからず、それは現在大きな問題となっている。

質問8. タンザニアでの道路開発における技術援助について。アメリカなど、様々な国が参入していると思うが、そこで日本が占める割合は？

回答8. 申し訳ないが今手元に明確なデータがないので何とも言えない。ちなみにそれは金額ベース？担当地域面積ベース？物量ベース？何を基準にするかによって、日本が占める割合は違ってくると思う。

質問9. 外大では英語を主に勉強されてきたと思うが、現地での言語ツールは英語？

回答9. はい。現地の先方も、高等教育を受けているので英語でのやりとりとなった。タンザニアで使われているスワヒリ語もできるだけ覚えて話すようにした。スワヒリ語はそんなに難しくないので、アフリカ専攻の人は頑張って下さい！